

I-JAS コーパス「対話」タスクにおける接続表現の使用について —中国語・韓国語・英語母語話者と日本語母語話者を比較して—

長田 涼子（テンプル大学ジャパンキャンパス）

The Usage of Transition Phrases by Comparing Japanese Learners of Chinese, Korean, and English with Japanese Native Speakers in I-JAS Corpus

Ryoko OSADA, Temple University, Japan Campus

要旨：現在、日本語教育の場面で接続表現はどのように教えられているのだろうか。学習者の接続表現使用について傾向がわかれば、学習者にとってより効果的な指導法を見出せるのではないだろうか。本研究では I-JAS コーパスの「対話」タスクを使用し、英語・中国語・韓国語を母語とする日本語学習者及び日本語母語話者の接続表現使用について調査した。その結果、相対的に学習者は日本語母語話者に比べ接続表現使用数が少ない、学習者は「そして」「その後」「それから」を多く使用する傾向がある一方、日本語母語話者は「そして」の使用は少ない、また、日本語母語話者は、「で」の使用数が多いということがわかった。

キーワード：学習者コーパス、I-JAS コーパス、日本語学習、接続表現

1. 背景と目的

日本語教育の場面で接続表現はどれぐらい体系的に教えられているのだろうか。他の文法事項に比べ、接続表現の習得に関しては、それほど重点的に学習する機会のない日本語学習者が多いのではないだろうか。学習者にとって、接続表現は、日本語母語話者とは違い、体系的に教えられる必要があると思われる。学習者の接続表現使用について研究が進み、どのような傾向があるのかを知れば、日本語教員にとって学習者に接続表現を教える際のヒントとなるのではないだろうか。

接続表現についてこれまで様々な興味深い研究がなされてきた。浅井（2003）は、日本語母語話者と中国人日本語学習者による作文を調査し、接続詞の使用状況を比較・分析をしている。学習者の方が母語話者より接続詞使用は多く、「そして」「つまり」「そうすれば」「そうしたら」などの接続詞に関しては、母語話者より学習者の方が多く使用していたこと、「だから」「だけど」「でも」などの主に話し言葉に使われる接続詞については、学習者は用いているが母語話者は用いていないことなどが報告されている。

倉持・鈴木（2007）は、留学生の接続詞使用状況の調査を実施し、1 学習者は接続詞をよく耳にし、目にしている割には正確に使えない、2 接続詞習熟には日本滞在年数は関係ない、3 接続詞は自然習得しやすいものも一部あるが、しにくいものが多い、4 初級のものとしてきた「そして」「それから」、N2 基準の「すると」に誤用が多いことを報告し

ている。

金（2017）は、YNU 書き言葉コーパスの 1,080 編の作文を対象に接続詞を抽出し、そのタイプ別に比較した結果、日本語母語話者、韓国語母語話者、中国語母語話者間の接続詞使用傾向に違いがあることを明らかにした。さらに、金（2017）は順接の接続詞に注目し、韓国語母語話者は「それで」の使用が目立ち、その理由として、日本語母語話者が「そこで」や「すると」を使用している時にも「それで」を使っていたためであると論じている。以上のように、接続表現についての興味深い研究はあるが、規模が小さいものが多く、また、中国語や韓国語母語話者対象の研究が多い。

一方、2020 年 3 月に完成した I-JAS コーパスは現在日本語学習者コーパスとしては最大規模のコーパスとして注目を浴びている。I-JAS コーパスはその完成前からデータの一部が公開され研究に使われてきた。I-JAS コーパスを使った研究としては、迫田、蘇、張（2016）、小西（2017）、李（2020）、石川（2020）などが挙げられる。

迫田、蘇、張（2016）は、I-JAS コーパスの中国語母語話者によるロールプレイを調査し、中国語母語話者は「念押し」の表現を多用するが、それは母語転移の可能性が極めて高いと結論付けている。

小西（2017）は、ストーリーテリングとロールプレイのタスクを用いて、中級レベルの日本語学習者と日本語母語話者の発話を語彙の観点から比較した。日本語母語話者はジャンルに適した語彙産出が見られた一方で、日本語学習者には見られなかった。また、日本語母語話者と日本語学習者で過小使用語と過剰使用語を抽出し、結果を質的に分析した。

李（2020）は、I-JAS コーパスのストーリーライティングの作文データを用い、作文における語彙のレベルと作文全体のリーダビリティについて分析している。初級後半から中級後半レベルの語彙については、学習者の習熟度が上がるにつれ、語彙の使用量も増えていることを報告している。またリーダビリティについては、学習者の習熟度が上がるにつれて、リーダビリティの難易度も上がり、上級学習者の作文は初級後半から中級後半相当になると結論付けている。

石川（2020）は、I-JAS コーパスの対話タスクにおける、12 種の異なる母語を持つ中級の学習者と日本語母語話者による副詞の使用について比較・分析をしている。学習者の副詞の使用数は日本語学習者の半数ほどであること、母語の言語系統による差は見られなかったこと、また、学習者と日本語母語話者がそれぞれ特に高頻度で使用している副詞や、学習者全体が日本語母語話者に対し、特徴的に過剰または過少に使用している副詞などを挙げている。

このように I-JAS コーパスを使った研究はあるが、接続表現に関する研究の数はまだ少ない。以上のことを踏まえ、本研究では I-JAS コーパスを使用し、英語・中国語・韓国語を母語とする日本語学習者及び日本語母語話者の接続表現使用について調査した。

2. 調査方法と研究課題

本研究では、多言語母語の日本語学習者横断コーパス（International Corpus of Japanese as a Second Language、以下 I-JAS コーパス）中納言 2.4.5 データバージョン 2020.03 の「対話」タスクを使用して、英語・中国語・韓国語を母語とする日本語学習者及び日本語母語話者の接続表現使用について調査した。対象とする接続表現は石黒（2009）に挙げられている 137 種の中から、日本語母語話者が 10 回以上使用している 28 種を抽出した（接続表現については表 2 を参照）。本研究の研究課題と調査方法は以下の通りである。

研究課題 1

I-JAS コーパスの「対話」タスクにおいて、中国語・韓国語・英語・日本語母語話者の間で接続表現の使用頻度について違いが見られるか。

→【調査方法】接続表現の相対頻度を計算、また、ピボットテーブルによる集計および SPSS による一要因分散分析を実施。

研究課題 2

中国語・韓国語・英語・日本語の母語話者ごとに多用する接続表現に違いがあるか。

→【調査方法】ピボットテーブルの集計及び SPSS によるコレスポンデンス分析を実施。

3. 調査結果と考察

まず、I-JAS コーパスの「対話」タスクにおいて、中国語・韓国語・英語・日本語母語話者の間で接続表現の使用頻度について違いが見られるかという研究課題 1 の結果について述べる。接続表現使用総数は中国語母語話者（100 名）が 3,598、韓国語母語話者（100 名）が 7,404、英語母語話者（100 名）が 4,330、日本語母語話者（50 名）は 7,302 となっている。母数が異なるため、小林（2019）を参考に、単純頻度を総語数で割り 1000 語あたりの相対頻度を計算した。各グループの相対頻度は表 1 の通りである。

表 1 1,000 語あたりの相対頻度

	中	韓	英	日
1,000 語あたりの相対頻度	1.29	2.13	1.56	3.12

表 1 からわかるように、韓国語母語話者の接続表現使用は日本語母語話者に近いが、中国語母語話者と英語母語話者は日本語母語話者に比べ、接続表現の使用頻度が低い。また、相対的に学習者は日本語母語話者に比べ、接続詞の使用数は少ない傾向があるということがわかる。これは学習者の産出する一文の長さは日本語母語話者に比べて短い傾向があることの影響していることも考えられる。習熟度が上がり、より長い文章・複雑な文章を話せるようになれば、接続表現の頻度も上がるかもしれない。また、分散分析を行った結果、グループ間では有意差が見られた($F(3,22630) = 67.122, p = .000, \eta^2 = .09$)。

次に、中国語・韓国語・英語・日本語の母語話者ごとに多用する接続表現に違いがあるかという研究課題 2 の結果についてであるが、各接続表現の使用数は以下の通りである。

表2 母語話者ごとの接続表現使用数

接続表現	母語				
	中国語	韓国語	英語	日本語	合計
あと	81	92	34	307	514
逆に	4	14	1	40	59
結局	3	31	12	48	94
けど	403	2,395	1,056	2,218	6,072
けれども	9	156	31	252	448
最後に	12	10	7	23	52
最初に	2	32	6	26	66
しかも	5	8	4	15	32
じゃあ	19	33	29	46	127
そうすると	0	1	1	27	29
そして	786	197	692	14	1,689
その後	56	112	68	37	273
それから	162	58	133	32	385
それで	74	684	133	179	1,070
だから	287	334	258	232	1,111
だけど	13	71	34	18	136
ただ	115	138	18	102	373
たとえば	2	5	12	21	40
で	52	141	201	1,005	1,399
ていうか	4	75	1	66	146
ですけど	225	1,552	374	1,738	3,889
でも	1,271	1,216	1,220	604	4,311
というか	3	26	1	62	92
とくに	0	0	0	113	113
とにかく	8	10	4	27	49
むしろ	1	10	0	10	21
要するに	0	2	0	29	31
要は	1	1	0	11	13
周辺	3,598	7,404	4,330	7,302	22,634

ここから、1) 学習者は「で」の使用が少ない一方、日本語母語話者は多く使用している、2) 中国語・韓国語・英語母語話者は「そして」「その後」「それから」を多く使用する、

る傾向がある一方、日本語母語話者は「そして」の使用は少ない、3) 中国語・韓国語・日本語母語話者に比べ、英語母語話者は「ただ」の使用が少ない、ということがわかる。1)及び2)については、日本語母語話者は会話では「そして」を使用せず「で」で代用しているケースが多く、そのため「で」の使用数が多くなっているのではないだろうか。また、日本語母語話者にとって「そして」は口語ではなく文語で使う接続表現なので、「そして」の日本語母語話者による使用数は少ないのではないだろうか。

また、コレスポンデンス分析の結果、日本語母語話者はいろいろな接続表現を使用しているのに対し、中国語・韓国語・英語を母語とする学習者は使用する接続表現に偏りがあることが分かった（図1）。なお、イナーシャの寄与率は次元1が.768、次元2が.971であった。一般的に、日本語母語話者に比べ習得している語彙数が少ない学習者は、使用する接続表現の種類が、日本語母語話者に比べて少ないことは容易に理解できる。

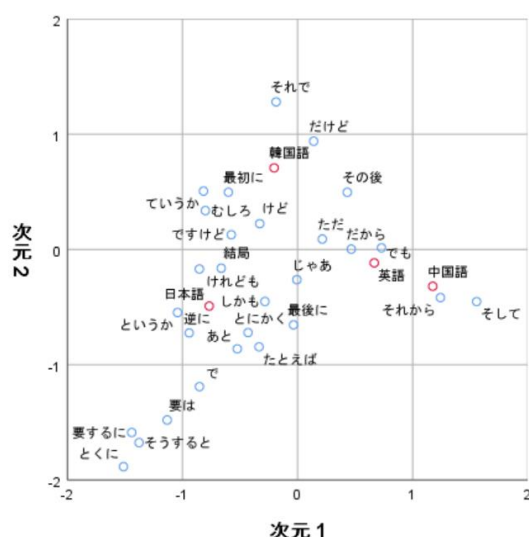


図1 コレスポンデンス分析結果

4. おわりに

本研究では、I-JAS コーパスの「対話」タスクにおいて、中国語・韓国語・英語・日本語母語話者の間で接続表現の使用頻度について違いが見られるか、また、中国語・韓国語・英語・日本語の母語話者ごとに多用する接続表現に違いがあるかについて調査した。接続表現の使用数については、学習者は日本語母語話者に比べ使用数が少なかった。また、学習者は「そして」「その後」「それから」を多く使用する傾向がある一方、日本語母語話者は「そして」の使用は少なく、また、日本語母語話者は、「で」の使用数が多い、ということもわかった。日本語母語話者は、話す時と書く時で使用する接続表現を使い分けているのではないだろうか。学習者も日本語母語話者のように、いろいろな用法で「で」を使用したり、話す時と書く時で接続表現を使い分けたりすることができれば、より日本語母語話者に近い日本語の産出につながるのではないだろうか。

なお、今後の研究課題としては、他の言語の母語話者も対象にしたり、あるいは、一つ一つの接続表現についてデータを細かく見て行くと、また何か新たな発見があるのではないと思われる。また接続表現を「順接」や「逆接」などのジャンル別に分類して調査したり、また、学習者の習熟度別に調査してみたりすると興味深い結果が得られるかもしれない。

参考文献

- 浅井美恵子. 2003. 「論説的文章における接続詞について-日本語母語話者と上級日本語学習者の作文比較」、『言葉と文化』4、87-98.
- 市川孝. 1978. 『国語教育のための文章論概説』東京：教育出版.
- 石黒圭. 2008. 『文章は接続詞で決まる』東京：光文社.
- 金蘭美. 2017. 「YNU 書き言葉コーパスに見られる日本語学習者の接続詞の選択：韓国語母語話者の「それで」の多用に注目して」、『ときわの杜論叢=The journal of Tokiwanomori』4、52-68.
- 倉持益子・鈴木秀明. 2007. 「日本語学習者における接続詞の習得－留学生の接続詞使用状況」、『神田外語大学紀要』19、211-234.
- 小林雄一郎. 2019. 『ことばのデータサイエンス』東京：朝倉書店.
- 小西円. 2017. 「日本語学習者と母語話者の産出語彙の相違：I-JAS の異なるタスクを用いた比較」、『国立国語研究所論集』13、79-106.
- 佐久間まゆみ. 1990. 「接続表現(1) (2)」寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一（編）『文章・談話のしくみ』12-33、東京：おうふう.
- 迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬. 2020. 『日本語学習者コーパス I-JAS 入門』東京：くろしお出版.
- 迫田久美子・蘇鷹・張佩霞. 2017. 「中国人日本語学習者の「念押し」表現に見る母語の影響：I-JAS のロールプレイにおける依頼表現に基づいて」、『国立国語研究所 言語資源活用ワークショップ発表論文集』2、212-215.
- 田中章夫. 1984. 「4 接続詞の諸問題—その成立と機能—」鈴木一彦・林巨樹編『研究資料 日本文法第4巻 修飾句・独立句編 副詞・連体詞・接続詞・感動詞』81-123、東京：明治書院.